XB10-299

博物館藏版

教草 第五 樟蟲一覧

九そ日用に供する衣食の如き人皆之を衣とし之を食して何ものたるを知らさるより其物品を改正良善にするの術に暗く従て新規の發明なく國産を繁殖せしめて各其業に就く事を知らず故に父兄たる者其子弟をして幼時より各業の大畧を知らしむることきは他日脩産の基となるべし嚮に明治六年澳國博覧會出品の際に乗し各種職業の教草を編成せしめ画図を加へ以て童蒙に便せり然に舊版第一より第廿四まで明治八年七月の火災に罹りしにより今之を再刻し兼て従前の謬誤を正し遺漏を補えしむと雖も其圖の舊版を再刻する者の如きは鮮明ならざるところあり看者之を恕せよ且我國産の多き此一部の盡もする所に非ず此餘の如きは以て他日に譲る

明治九年二月

田中芳男記

2007952260

第一 稲米 第二 糖製 第三 養蚕 第四 生糸 第五 樟虫
第六 野蚕 第七 葛布 第八 苧麻 第九 草綿 第十 纖緯草木
第十一 索麪 第十二 葛粉 第十三 藍 第十四 青花紙 第十五 製茶
第十六 烟草 第十七 漆 第十八 蒔繪 第十九 蠟 第廿 白朸
第廿一 疊表 第廿二 香蕈 第廿三 製紙 第廿四 蜂蜜 第廿五 油
第廿六 臙脂 第廿七 澱粉上 第廿八 澱粉下 第廿九 褐腐 第卅 豆腐

定價金五錢

版權所有

教草 第十五 樟蠶一覽

樟蠶ハ天蠶絲を製し又布帛を織り其用春蠶夏蠶野蠶に亞ぎ民益を成すものにして詳かに小原良直が著せる桃洞遺筆に見えたり此蟲諸國に産せども別て薩摩、丹波、美濃、信濃邊に多く其棲止して食餌とせる樹ハ所に於て大同小異なれども大凡ハ樟、栗、櫟、漆、胡桃、柿、塩膚木、冬青等の樹なり其他の樹木にも生ずるなりと雖も殆ど希なり薩摩にてハ樟を[illegible]く養ふを上等とし漆にて養ふを中等と[illegible]を信濃にてハ栗にて養ふものを上等とし櫟にて養ふものを中等とす信濃にてハ早[illegible]の年にハ甚少しと云ふ薩摩にて[illegible]遅雨の年にハ蟲の生育宜しからず其蟲にて製しえる天蠶絲ハ有力の魚を釣に堪ずと云へり

樟蠶の形ハ烏蠋に似て其色ハ緑なり長さ三寸許にして背上[illegible]白毛を生じ因て又「シラガダユウ」「シラガタラウ」等の稱あり土人其形の醜悪なると常木を蠶食するを以て悉々之を打殺して養ふもの絶て無し然れども天蠶絲を製せんとせるものハ豫じめ蟲の生ずる樹をバ得と検査し若シ蟲の數と其葉の量と過不及ある時ハ其蟲を増損斟酌して食餌に適せしむるなり四度の休起ハ[illegible]にて甚長し[illegible]蠶ハ黒色にして[illegible]青色に變じ彼白毛盡く脱落して而後に繭を作り大き拇指許にして其色[illegible]茶褐其質頗る堅靭にして網状をなし恰も銅網を模索するが如く[illegible]ある蛹を洞見すべし故に又「カシダワ」「ヤマノカミノヘチマ」等の名あり或ハ之を指袋にして田畝の雑草を採るものあり又概ね児童の玩弄に供せるに過ぎざれ然れども人工を盡して絲を製し布を織べし之を方言に「ムシノスヌリ」と云ふ但シ其労ハ春蠶に倍して功ハ及ばず[illegible]之を織る者極て少し此絲にて織たるハ經ハ春蠶絲緯ハ山繭絲を用て[illegible]本絲を用べし如何となれバ本絲ハ他絲に比すれバ其質太きが故に梭に掛らず且衣裳に製するも其品粗悪にして人の好尚に應ずるに足らざれバ

此繭を以て絲を製するにハ先蕎麦灰汁に和し鍋内に納れ之を煮る事大凡一日間にして新巣ならバ半日間にて宜し是旧巣より新巣ハ煮て糜軟となり易ければなり而後之を流水に涵し灰汁を洗去り両手にて幾々揉て和げ漸綿状となるを度として日光に曝乾し綿纏の如く紡績するなり若之を紡車に掛る時ハ寸断して資用すべく[illegible]旧巣ハ固より絲に[illegible]數時間煮て極て柔軟ならしめ綿に製し水綿と打交て絲に製するなり

今茲明治壬申夏四月官命を信濃に下し一二三の織婦をして經緯ともに本絲にて製せしむ彼も官命を奉じ多少の苦心ありて之を織て官に上りし[illegible]にして精緻巧妙にして平常の品と大に異なり然れども絲性粗悪なれども良工に托して精製せしむる時ハ佳品を得ると必せり

天蠶絲を製するにハ蟲の十分成長してもはや一二日の内に繭を作らんとするの期に至り氣孔の邊に黒色を發し彼白毛全く脱落するを熟視して蟲の棲止する樹より振落し蟲頭を截断し其背を中央より縦に裂き腹中なる二條の絲を採出し嚴醋に浸して其白色に変ずるを度として左右に引延し板に載せ又ハ絲の端末を針に結付畳にさして曝し或ハ地に枝を立て之を纏て乾かすなり薩摩にてハ竹弓の弦に掛け恰も弦を張るが如くして乾かすなり稍かわきたるを再明礬水の微温なるものに浸し煮て後清水を以て善く洗ひ全く酸氣を去しむべし然ざれバ其絲甚弱し尚時日を歴るに從ひ透明に成るなり其質透明に成ざれバ資用するに堪ず若之を潮水に浸して濕潤せざれバ其絲縮んで軟弱になるなり

天蠶絲ハ全く此蟲に限るに非ず尋常の蠶にても製すべしと雖も本蟲の絲最強して且養の労も少く繭と成ても春蠶の如き價なきが故に專之を製して釣緡となし垂竿漁客の需に供するなり

樟蠶の繭より蛾に成るの間ハ尋常の蠶よりも時日甚長し九八七月上旬に繭を作て九月の下旬に羽化す其[illegible]山繭の蛾に似て稍小く其色茶褐にして銀光を帯左右の翼に黒星を点ずる事二ツ處々に斑紋ありて雌雄ともに異なる事なし然も雄の髭鬚ハ羽毛状にして雌の髭鬚ハ細小角の如し且雌の體ハ自ら大にして其羽少しく青白色を帯べり

明治五年冬

博物局

信夫粲 編選

菅蒼圃 圖畫

男爵田中芳男氏寄贈
先代田中芳男男旧蔵書
昭和十年

B 65992

東京大学総合図書館